

ヨアヒム・フォン・ザントラルトの 『ドイツのアカデミー』にみる「版画の起源」

‘The Origin of Graphic Art’ in *Teutsche Academie* by Joachim von Sandrart

保井 亜弓

YASUI Ayumi

本稿は、17世紀までのドイツ語圏文献において初期の版画がどのように記述されているのかを検証する研究の一環として、ヨアヒム・フォン・ザントラルト Joachim von Sandrart (1606–1688) による『ドイツのアカデミー』(1675、79) のイスラエル・ファン・メッケネム伝中で語られる「版画の起源」にかんする部分を考察するものである。該当部分の試訳は論文末尾に加えた¹。

ザントラルトと『ドイツのアカデミー』

ヨアヒム・フォン・ザントラルトは17世紀のもっとも著名なドイツ人画家、著述家であり、とりわけその『ドイツのアカデミー』で知られている²。

ザントラルトはネーデルラントのワロン地方から亡命してきた裕福なカルヴァン派の一家の息子として、フランクフルトに生まれた。恵まれた環境の中で彼の芸術的形成はすぐれた師のもとで行われた。初期の修業では、フランクフルトでゼバスチャン・ストックopf Sebastian Stockopfに素描を、プラハでエギディウス・ザーデラー Aegidius Sadelerに版画を学び、ザーデラーは彼に絵画に転向するように勧めた。1625年にはユトレヒトでヘリット・ファン・ホントホルスト Herrit van Honthorstの工房で仕事を始める。ここでピーテル・パウル・ルーベンス Peter Paul Rubens と出会ったことが切っ掛けとなり、ホントホルストとともにイギリスに行った翌年の1629年にイタリアに向かう。ヴェネツィア、ローニャを経てローマに着き、イタリア滞在中はナ

ポリも訪問している。この間に、イタリア人のドメニキーノ Domenichino、あるいは北方出身のクロード・ロラン Claude Lorrain やニコラ・プッサン Nicolas Poussinをはじめとした多くの画家との知遇を得た。

1635年にはフランクフルトに戻るものの、30年戦争の渦中であったため、1637年にはアムステルダムに移り、はじめての肖像画注文を得て画家としての地位を築いていく。1645年にはドイツに戻りインゴルシュタット近郊のシュトッカウの領地に居を構え、教会や皇帝のための仕事など重要な注文を受けるようになった。後にアウクスブルク、ニュルンベルクに移り同地で没した。画家としての多くの榮譽を得たザントラルトは、1660年代以降、その豊かな芸術的経験と教養に基づき、理論家あるいは指導者として活躍するようになり、ニュルンベルクとアウクスブルクのアカデミーの創設(1662、1670)に少なからぬ貢献を果たした。

『高貴なる建築、彫刻、絵画のドイツのアカデミー *Teutsche Academie der Edlen Bau- Bild und Mahlerey-Künste*』の執筆はニュルンベルクの詩人ジクムント・フォン・ビルケン Sigmund von Birkenの協力のもとに1668年から始められ、1675年にニュルンベルクで上梓された。全体の構成はジョルジョ・ヴァザーリ Giorgio Vasariの『芸術家列伝 *Vite*』(1550、1568)の先例に従っている。つまり建築、彫刻、絵画の理論編に続き芸術家の伝記が納められている。伝記ではまず古代の芸術家に始まり、近世のイタリアの芸術家、そしてドイツ・ネーデルラントの

芸術家（ここにはフランスの画家と版画家の二章が加えられている）が語られる。巻末には自身の詳細な自伝が加えられている。ザントラルトは1679年にも同名の続編を出版し、同様に建築、彫刻、絵画の理論を素材やコレクションまた各ジャンルにわたってより詳しく展開し、オウィディウスの『変身物語』の翻訳を、カーレル・ファン・マンデルCarel van Mandelが『絵画の書*Schilder-Boeck*』に加えたそれを翻案して加えた。したがって、この二書は第一主要部、第二主要部と呼ばれている。さらにザントラルトは、1980年にはヴィンツェンツォ・カルターリVincenzo Cartariによる『古代神像*Imagini de i Dei de gli antichi*』の新たな翻訳を挿絵本として出版すると同時に、上記の自著の読者をさらに広げるためにラテン語版の出版にも着手した。ヨーロッパ各地に滞在したザントラルトが、その深い教養と交友関係に基づき、さまざまな文献を用いて著したのがこれらの著作だといえる。

理論編では、古代の著作や最新の文献に基づいた建築および彫刻論に多くの珍しい挿絵が加えられている。一方絵画論および伝記は、ヴァザーリの『芸術家列伝』やファン・マンデルの『絵画の書』（1604）に依るところが大きい。むしろ、ザントラルトと同時代の画家たちについて、また1630年代のローマで活躍した画家たちの状況について、『ドイツのアカデミー』は近世のもっとも重要な情報源のひとつに数えられる。そして、ザントラルトにとって同国ドイツの芸術家の伝記を伝えることには大きな意義があった。「版画の起源」もまた、ドイツ美術の擁護者としてのザントラルトの姿勢がよくあらわれている箇所である。すなわち、この記述はヴァザーリが語る「版画の起源」に対する激烈な批判なのである。ザントラルトの「版画の起源」を検討する前に、ヴァザーリのそれを見ておく必要があるだろう。

ヴァザーリの『芸術家列伝』における「版画の起源」

周知のごとく、ヴァザーリはボローニャのマルカントニオ・ライモンディMarcantonio Raimondi伝においてはじめての版画史を論じた³。マルカントニオ伝は、1568年の第二版に収められている。ヴァザーリの芸術家伝では、ひとりの芸術家の幼少期から修業時代へと年代を追って語るか、または何人かの芸術家をまとめて、その代表者の名を冠して語ることが常であるのに対して、ここでは最初から表題に反して銅版画の始まりについて述べている。全体は二つの段落に分かれ、およそ前半が古の版画家、後半が同時代の版画家に当てられている。前半では、マーズ・フィニグエツラMaso Finiguerraが直刻法（エングレーヴィング⁴）の創始者であり、それが北方のマルティン・ショーンガウワーMartin Shongauerに伝わったとして、次にアルブレヒト・デューラーAlbrecht Dürer、リューカス・ファン・レイデンLucas van Leydenという北方の版画家たちについて述べている。その中でマルカントニオがデューラーの版画を模倣し、それを知ったデューラーがヴェネツィア元老院に特許の求めを訴えたというエピソードにも触れている。また、ファン・レイデンはマルカントニオよりも14歳ほど年下であるにもかかわらず⁵、北方の先人としてまとめて前半に入れられている。後半は、マルカントニオから始まるものの、マルコ・デンテMarco Denteやアゴステイーノ・ヴェネツィアーノAgostino Venezianoといった彼の直接の後継者たち、ウーゴ・ダ・カルピUgo da Carpiとキアロスкуро多色木版画、腐蝕銅版画（エッチング）の技法とフランチェスコ・パルミジャーノFrancesco Parmigianoにも触れ、さらにはヒエロニムス・コックHieronimus Cockやデューラーの後継者たち、そしてマールテン・ヘームスケルクMaarten Heemskerckといった北方の版画家たちにも多くを割いている。

「版画の起源」についての記述をさらに詳しく見ると、エングレーヴィングについては、先に述べた

ようにフィレンツェのフィニグエツラが1460年頃に発明したと述べている。それにバッチョ・バルディーニBaccio Baldini、アンドレア・マンテーニャ Andrea Mantegnaが続き、さらにこの技法がショーンガウワーに伝わったと述べる。ヴァザーリは絵画論33章でニエロ技法について語る箇所ではフィニグエツラを賞賛しているものの、そこでは彼が創始者であるとの記述はなく、このマルカントニオ伝で初めて表明されている。2版あるいは3版による多色のキアロスクーロ木版画については、すでに絵画論で記述したことに触れ⁶、ウーゴ・ダ・カルピが最初にこれを試み、成功させたと伝えている。エッチングについては、絵画論にその技法の記述はなく、マルカントニオ伝のみに簡略に記されている。エングレーヴィングをより容易にできる方法として、エッチングの発明は大変賞賛されるべきだとし、その方法を防蝕被膜（ワックス、ワニス、油彩絵の具）で銅版を覆い、鉄針で描いて、腐蝕液をかけるとしている。そして、この方法でパルミジャーノが小型の作品を制作したことを述べている。1550年第一版のパルミジャーノ伝では、銅板や鉄板にエッチングを行ったとある⁷。

ザントラルトの反論

ザントラルトが「版画の起源」について反論したとき、ヴァザーリの記述の形式を念頭に置いていたことはおそらく間違いない。ヴァザーリがマルカントニオ伝の冒頭で版画論を展開したのと同様に、ザントラルトがもっとも早い版画家のひとりとして見做していたイスラエル・ファン・メッケネム伝中で反論を行っている。むしろこの箇所全体がほぼ版画論であるという点もヴァザーリの記述に類似している。また、それに先立つイタリア画家伝におけるマルカントニオ伝を筆頭とするイタリア人版画家たちの章の冒頭でも、この話題に触れている。反論を強固に主張するためにも、ヴァザーリが版画論を展開したのと同じ箇所ですら持論を述べなければならなかったのだろう。

実際にはヴァザーリのマルカントニオ伝の前半は、ショーンガウワー、デューラー、ファン・レイデンという北方の版画家たちをかなり取り上げているものの、やはり発明者の栄誉が与えられるのがイタリア人なのかドイツ人なのか、ということはヴァザーリとザントラルトの両者にとって大問題だったのである。ザントラルトの主張には、マンテーニャとデューラーとの関係が逆転しているなど明らかに事実に反する記述、年代の誤り、誇張などが混じってはいるものの、「版画の起源」という点にかんしては現代の版画史からしてそれほど外れたものではない。活版印刷術発明以前に木版の技法が発達していたであろうという推論、エッチングにかんしてデューラー作品が先行するという指摘も真つ当であるといえる。

イスラエル・ファン・メッケネムは、ドイツにおける美術書で版画家としてはじめて名前があげられている人物であり、早くから名が知られていたと考えられる。ファン・マンデルもメッケネムを初期の版画家と見做しており、メッケネムがデューラー作品を模した《4人の魔女》を、反対にデューラーが模做したと誤って書いている⁸。ザントラルトはメッケネムを慎重にも「最初の、あるいは最初のうちのひとり」の版画家と記し、さらにショーンガウワー以前に先行すると彼が考えたモノグラミストたちにも言及している。ヴァザーリが挙げたショーンガウワーよりも年代の早い版画家がいることを示すことがザントラルトにとっては重要だったに違いない。このようにしてザントラルトは、ヴァザーリとは反対に、ドイツからイタリアへと版画芸術が伝播したのだと主張する。

少なくとも「版画の起源」についての議論において、ヴァザーリの主張は明らかに誤りであり、軍配はザントラルトに上がるであろう。愛国心に裏付けられた発明者の栄誉は何よりもまして重要であったに違いない。ヴァザーリに多くを依拠しながらも、この点については断固として反論するザントラルトの態度から、ドイツ人が自国の版画芸術をいかに誇

りに思っていたのか。ドイツ美術において版画芸術がいかに重要な位置を占めていたかを理解することができるのではないだろうか。

註

- 1 翻訳には、主に電子版『ドイツのアカデミー』*Joachim von Sandrart: Teutsche Academie der Bau-, Bild- und Mahlerey-Künste, Nürnberg 1675-1680, Wissenschaftlich kommentierte Online-Edition*, hrsg. von T. Kirchner, A. Nova, C. Blüm, A. Schreurs und T. Wübbena, 2008-2012を使用した。電子版については、保井亜弓「ヨアヒム・ザントラルトの『ドイツのアカデミー』における版画についての記述、および「直彫り法と腐蝕法について」の翻訳」渡辺晋也、幸福輝、陣岡めぐみ、保井亜弓『西洋近世版画史の一次史料調査』（科研報告書）2013年、pp. 27-33参照のこと。
- 2 ザントラルトの生涯と『ドイツのアカデミー』については、Joachim von Sandrart and the "Teutsche Academie", T. Kirchner, A. Nova, C. Blüm, A. Schreurs und T. Wübbena, op. cit.; Christian Klemm, Sandrart, Joachim von, *The Dictionary of Art* 27, New York, 1996, pp.724-726および*Joachim von Sandrart, Deutsche Academie der elden Bau-, Bild-, und Mahlerey-Künste, Nürnberg 1675 und 1679*, 3 vols, 1994, クリスチャン・クレムによる解説を参照のこと。
- 3 本稿では、ヴァザーリの版画論を論じた次の文献を参照した。Robert H. Getscher, *An Annotated and Illustrated Version of Giorgio Vasari's History of Italian and Northern Prints from His Lives of the Artists (1550 & 1568)*, 2vols, New York/ Ontario, 2003.
- 4 ドライポイントも直刻法であるが、ここではエングレーヴィングを指している。
- 5 マルカントニオ (ca.1480-ca.1530)、リユース・ファン・レイデン (1494-1533)。Getscher, op. cit., vol.1, p.5.
- 6 絵画論第35章
- 7 Getscher, op.cit., p.142.
- 8 尾崎彰宏、幸福輝、廣川暁生、深谷訓子『カーレル・ファン・マンデル「北方画家列伝」注解』中央公論美術出版、2014、pp.68-69。ザントラルトもデューラー伝においてファン・マンデルによるこの誤解を踏襲しているものの、ファン・マンデルが「三美神」としていた主題を「魔女」と正しく改めている。TA 1675, II, Buch 3 (niederl. u. dt. Künstler), S. 222, <http://ta.sandrart.net/-text-438>

ヨアヒム・フォン・ザントラルト『ドイツのアカデミー』(1675年)第2部第2書「イタリアの芸術家」第23章「ポローニャの銅版画家マルカントニオ」冒頭部分 (pp.204-205) の試訳

第23章ポローニャの銅版画家マルカントニオ、ならびにこの国でこの技を成すその他のもっとも著名なすべての工匠たち

目次

イタリア人たちは直刻法の発明を自身に帰そうとする。しかし[それを]当然与えられるべきはドイツ人である。この技について、マルカントニオは学び、そこで彼はデューラーの作品を模倣した。そしてさらに他の作品を制作した。(中略)ウーゴ・ダ・カルピは、イタリアでは初めて木版で2、3版を彫った。(中略)フランチェスコ・パルメジャーノ[パルミジャーノ]はドイツ人の腐蝕法にはじめて倣った。(後略)

マルカントニオについては、当代までイタリアで最も有名な銅版画家に帰されているが故に、私はその始まりについて考えることが正当であると思われる。というのも、アンドレアス・ヴァサルスの297葉は、われわれドイツ人についてほんのわずかしら知らず、その榮譽をアンドレア・マンテーニャに、あたかも彼自身がこの芸術の最初の発明者であるかのように横取りせんと報じている。彼は、金銀細工師がビュランを使って、銀をたたいてベルトに葉模様、グロテスク模様などを彫っていたのを見覚えて、それらを黒くして、濡れた紙に刷った。そして、銅に彫ることを初めて発明したという。その後彼は銅に描いた彼の作品が非常に賞賛された。それについては、後にドイツではマルティン・シェーン[ショーングアウワー]がそれを学びとったという。

しかしここには大いなる誤りが見いだされる。というのも、直刻法、そして腐蝕法や木版画の高貴なる発明の榮譽は、イタリア人により行われたのでは

なく、シュトラスブルクでの1440年の書物印刷術と同様に、それは当然ドイツ人に帰されるものである。マンテーニャが1500年にこの芸術を始めたことを考慮すると(すでにそれより早く、彼が生まれる以前に)ドイツ人においては、この高貴なる芸術は高い完成度をもって栄えていた。それだから、どれほどにマンテーニャ自身は、アルブレヒト・デューラーの銅板に彫られた受難伝やその他の作品に驚いたことだろうか。なぜなら、彼はそのような完成度の高いビュランの扱いについて行くことが適わなかったであろうからである。またデューラーやマルティン・シェーンが、マンテーニャよりもずっと以前に世に出ていることにも沈黙している。そして、イスラエル・フォン・メツヒェルン[ファン・メツケネム]の作品はドイツから最初にイタリアに渡ったのだ。それによって、彼らに手本を模倣するという切っ掛けが与えられたのだ。その中にマンテーニャがいて、なるほどイタリア人としては最初かもしれないが、正しい根拠を持ち得ない。マルカントニオはよりうまくそれに続いた。彼はドイツの手法と様式を取り入れた。彼はポローニャでかなりよく素描や絵画芸術を学んだことにより、やがてそれにおいて上達した。しかしさらなる進歩のために、彼はヴェネツィアに赴き、何よりもましてアルブレヒト・デューラーの36枚のキリストの受難伝の木版画を聖マルコ広場で見つけた。彼は、その各々をととも高く賞賛していたので、非常に高い値段で買った。当時イタリアでは木版画はあまり知られていなかったとみえて、それを彼は模倣し始め、銅版に荒いビュランで急いで彫った。各々は、彼にはたいへん幸運なことにオリジナルと見なされた。しかしアルブレヒト・デューラーがその一枚を手に入れると、彼は自身でそれがためにヴェネツィアへ赴き、元老院に特許の求めを、それらとほかの全ての作品を彼の手から模倣することの権限は誰にも与えられないのだということを訴えた。そして、なぜ彼がその共和国に留まったのかを明らかにし、デューラーの名がマルカントニオのそれから取り除かれなければならないことを獲得した。そしてアントニオは意に反して

ローマに赴き、初めてマンテーニャの作品を知ったが、それ以後も銅版においてはドイツの手法に従った¹。(後略)

註

- 1 ザントラルトは、ヴァザーリによるマンテーニャがローマで活躍したという誤った記述をそのまま受け継いで述べているようである。しかし、ここで注目したいのは、ザントラルトがマンテーニャとマルカントニオが従ったというドイツ式の版画様式を識別している点である。

ヨアヒム・フォン・ザントラルト『ドイツのアカデミー』(1675年)第2部第3書「ネーデルラントおよびドイツの芸術家」第二章X・「イスラエル・フォン・メッヒェルン」(pp.218-220)の試訳

第2章 ミヒャエル・ヴォルゲムート、イスラエル・フォン・メッヒェルンおよびその他3人の芸術家

目次

IX. ミヒャエル・ヴォルゲムート、ニュルンベルクの画家。X. イスラエル・フォン・メッヒェルン、銅版画家。イタリア人たちは直刻法や腐蝕法、また木版画の発明を自らに帰そうとする。しかしそれはドイツ人に当然与えられるべきである。以下のごとく検証される。まず第1の木版画については、それが書物印刷に起源をもつ。第2に腐蝕法。第3に直刻法。さまざまな非常に早い時期の銅版画家たち。(後略)

あらゆるドイツ人およびイタリア人の中で、銅版画によってその名を知られ、その作品においてその名がわかる者で、イスラエル・フォン・メッヒェルンよりも古い時代の人はいない。銅板に彫ったり、腐蝕したり、あるいはまた木に彫ったりするこの高貴なる知識のはじめの事の起こりについていくらかお伝えしよう。

たとえ才気あふれるジョルジョ・ヴァザーリが、フィレンツェの金細工師マーゾ・フィニグエツラとバッチョ・バルディーニが、もっとも早くにその時代のやり方にしたがって金工の銀のベルトの上のすべての装飾を彫刻用具で彫り、それによって野心あふれたアンドレア・マンテーニャに、1505年に銅版画を制作するきっかけが与えられたことを故として、よく知られているようにこの芸術の発明の荣誉がイタリア人にあるとすでに示しているにせよ、そして彼がまた、フランチェスコ・パルメザニンが1530年頃に銅板に腐蝕することを始めたのだと、同じ頃またウーゴ・ダ・カルピが、あたかもこの時代以前に誰もこの芸術について知らないかのように、二枚あるいはそれ以上の版木の木版画を発明したとしているにせよ、彼は自ら酷く追いやられることになり、まさにその故意のいかがわしさによって痛い目にあうだろう。

そして彼が伝えていながら、自ら忘れてしまっていることがある。1511年にヴェネツィアの聖マルコ広場で初めてアルブレヒト・デューラーの木版画の受難伝が売られたとき、他の多くの画家の中でもマルカントニオは宿命的な驚きのまなざしでそれをじっと見ると、有り金すべてをこの彼にとっての宝と換えた。そして大変な熱心さで36点を模倣し、彼の模作が本物とみなされるようにした。その後、アルブレヒト・デューラーがそれを聞いてヴェネツィアにやってきて、共和国にかれの作品についての元老院の特許を求めた。そのため、マルカントニオはアルブレヒト・デューラーの名を取り除かねばならなくなった。それによってイタリア生まれのかのヴァザーリは、この芸術がすでにそのときにイタリアで生まれていたにちがいないことは明らかだとした。同じ頃ドイツにおいては立派に成長し、その盛期をむかえていた。それは周知のことで、さらに芸術愛好家のところには、白と黒だけでなく、黄と白あるいは青と白の3版を刷りのものもあり、木版によって影だけでなく、ハイライトの白が刷られたものが、すでに1503年にドイツではたいへんよく行われていた。その後数年のうちに発展して、その完成

度はイタリア人が50年達成できない高みにまで達したのである。

同じころ、その知識の完璧さによって栄誉の冠をいただいていたデューラーは、彼の自伝の記述にしたがえば、1510年から1520年までに非常に多くの作品を木版で制作した。このことは、ドイツではすでにそのときこの芸術がいかにか影と光を描くことを高みにまで押し上げていたかを証言している、そこに加えらば、かの芸術家によって仕上げられた聖母像のみで十分だろう。それは聖アンナの膝に座る幼児キリストを拜んでいる。さらにルーカス・クラナハによって巧みに彫られたアダムとエヴァの作品、またハンス・バルドゥン・グリュン [バルドク・グリーン] による、馬小屋で馬のとなりで小姓が倒れているものや、うまく描かれている不吉な魔女が二股 [の木] を手にして進む [姿]、そしてかのデューラーによるその他の多くの作品があげられる。

それより古くに遡れば、デューラーがすでに1498年にヨハネ黙示録を木版で制作していた。同時代以前には、ニュルンベルクのハルトマン・シェーデル博士のドイツ年代記が肖像や地図や市街やその他の画像で埋められている。したがって私には次のことが真実であると思われる。木版画は印刷術と同じころ1440年に発明されたのだらうと。というのも、はじめは今のように金属の文字を使うことが知られず、すべての紙葉は木版で彫られていた。それゆえ、反論の余地なくその頃は木に彫ることは行われていたにちがいない。最初に刷られた本には、とくに葉型飾りや装飾が見られる。1488年に発行されたニュルンベルクの法政改革書や1487年にアウクスブルクでハンス・シェーンベルガーによって出版された、アウクスブルク市の裁判法規を扱ったベリアル書²、多種多様な図、風景、その他の画像は、この芸術がドイツ人のたゆまぬ努力に由来することを証明している。そして彼らによってそれから長くたってようやくイタリアにもたらされたのであろう。イタリア人自らが知っているように、シュトラスブルクで書物印刷術が発明されてから、それはシクストゥ

ム・ラジンガーによってナポリへ、ハンス・ラウテンバッハによってローマにもたらされたのであり、このことはハイデルベルクのコレギオ [コレギウム]・サピエンティアエの墓碑銘に一致する。

我が名はハンス・フォン・ラウテンバッハ
ローマではじめて書物を印刷す
神よ、わが魂に報いたまえ

今やイタリア人が木版画について自ら退くのと同様に、彼らが腐蝕法の発明を1530年頃のパルメザニーノと書くのもまた正しくない。これもまたそれ以前から長くドイツで栄えていた。愛すべき読者にそれを確かめさせるには、アルブレヒト・デューラーのよく知られた、エッケ・オモの小品を持って示しさえすればよい。彼はその刷りを1515年に仕上げた。また同じ年にそのオリーブ山でのキリストを腐蝕した。1516年にも受難具のある天使を、1518年には大砲を描く大作を制作した。すべてはこのように繊細であるので、おそらく彼以前に誰か親方がいたか、あるいはこの芸術はそれ以前に行われていたに違いない。

同様の誤りを、先のヴァザーリはフィレンツェの金銀細工師マーズ・フィングエッラについても隠している。アンドレア・マンテーニャが彼の作品から学びとり、およそ1505年頃にこの高貴な直刻法を発明したのだと偽っている。というのも、それに先だつてすでに長くドイツ人は銅板に大なる完璧さで多くの美しい作品を生み出しているからである。そして、最初のあるいは最初のうちの一人であると思われるのが、その作品に I. V. M. と記した、それゆえ噂によれば、イスラエル・フォン・メッヒェルンあるいはメッヒェン、他の少数の意見では、イスラエル・フォン・マインツを意味しているという。彼については、今日でも見ることができるものに、ヘロデ王の前での大きな舞踏がある。そこでは奥にヘロデが宴卓につき、聖ヨハネの切られた首がその前に置かれている。非常に繊細な葉型装飾の作品には、ミュンスター司教区のポッホルトで成せり、下

にイスラエル、と記されている。その他にもまだ多くの作品に私はあちらこちらの愛好家のところで出会う。大いなる熱心さをもってすれば、彼がさらに多くの作品を仕上げたのであり、しかしそれらは長い時を経て失われてしまったのだということを信じられるであろう。それに加えて、その中に見出される細長く珍しい図や服装は、この芸術家の時代の仕事のやり方と同様に、その作品中に年代を見出せないとしても、彼が225年以上前に生きて、その技を用いていたことを証明している。

彼の後に続くのが、おそらくその弟子であり、さまざまな異なった作品は今なおそのいくつかを見ることができるが、その名は知られていない。Wと記された、聖母マリアと聖ヨハネがいるエッケ・オモ。別の者は老人を彫ったが、その老人は若い女の胸に手をやって、女はその手で老人の財布を持っている。この作品には**HSI**のモノグラムが記され、完成した年、すなわち1455とある。また、B.Sと記された銅板もありそれはバルテル・シェーン [モノグラミストbs/bg] という名であるようだ。もうひとつのA.G.のついたものは、アルブレヒト・グロッケントン³と解する。このマイスターによる12枚の受難の物語はきわめて優美に描かれている。マルティン・ツィンクはその名をM.Zと示そうとした。それはまたマルティン・ザッツィンガー [マテーウス・ザジンガー] とも読める。これはその作品に添えられた年記1500年あるいは1501年に仕上げられている。そのソロモンや他の物語画にみられるように、彼の先達よりもいくぶん装飾的で、丸みを帯びた仕事をしている。このマイスターの作品は、アンドレア・マンテーニャあるいはマルカントニオが生まれたイタリアで長く知られたことがわかる。アゴスティーノ・ヴェネツィアーノもまたそれに続いた。彼がその作品を見覚えて模倣し、少しずつイタリアもこの芸術に参加していくことになった。

註

- 2 Jacobus de Theramo, *Consolatio peccatorum seu processus Belial-Der Teutsch Belial*, Augsburg [Johann Schönsperger] 1487. <http://ta.sandrart.net/bibliography-1030>
- 3 ザントラルトがアルブレヒト・グロッケントンとしているのは誤りで、おそらくマイスターAGの作品を指している。Annotation by Christian Possalt, dated 05/05/2009, <http://ta.sandrart.net/annotation-988>

付記

本研究は、科学研究費助成研究基盤(C)「ドイツ語圏16、17世紀文献にみる西洋初期版画」(H24-26 研究代表者：金沢美術工芸大学 保井亜弓)の成果の一部である。

(やすい・あゆみ 芸術学／西洋美術史)
(2014年10月31日 受理)